心地よい春風がそよぐ2023年4月。花き生産者を夢見る研修生の受け入れに積極的な田村農園に足を運ぶと、ビニールハウスの中で熱心に栽培技術を学ぶ若い男女の姿がありました。

2人はこの春、東京農業大学生物産業学部（網走市）を卒業したばかりの戸部颯斗さんと町田陽（ひの）さん。ともに関東圏出身の2人は大学で知り合い、故郷を離れ、広大な北海道の地で自然と触れ合う農業で生計を立てる暮らしに憧れを抱きます。

妹背牛は、主力品種「スターチス」の生産量が道内でも最大規模を誇る「北育ち元気村花き生産組合」の構成団体の一つ。人口減少、農業の担い手不足に悩む町に移住し、地域住民の期待を受けながら研修に励む2人の成長ぶりを追いました。

どうして妹背牛町に来たんですか？

初々しい表情の春

凛々しい顔つきの秋

千葉県流山市出身の戸部さんは、大学のフィールドワークで道東の知床や釧路湿原を訪れ、北海道の雄大な自然に魅了されました。花への関心も高く、卒業論文のテーマに据えるほど。自然と触れ合える農業に魅力を感じ、北海道農業担い手育成センターを通じて、妹背牛町の田村農園で研修を続けています。

一方、神奈川県川崎市で育った町田さんは、中学生のころから農業に関心があり、農業を学ぶなら一次産業が盛んな北海道という思いがありました。大学在学中に見る人に癒しを与える花の栽培にも興味を持ち、少ない面積で収益を上げる施設園芸を学んでいます。

2人に妹背牛町で花きの新規就農者を育てる話が舞い込んだ時、すでに町内で研修、就農する環境が整っていました。2人は実際に農業研修に関わる人たちとの対話を重ね、人柄の良さや花き産地としての責任、そして熱意を肌で感じました。

花き産地を守る生産者の熱い思いに感銘を受け、2人は大学を卒業後に妹背牛町への移住を決意。研修後の独立を目指し、故郷から離れた北の大地で新たな人生を歩み始めました。

田村農園で学ぶ

1989年（平成元年）から花きの研修生を受け入れている有限会社「田村農園」は「北海道の農業を守ろう」を企業理念に、これまでに短期・長期間で200人超の研修生を排出。花き生産者を志す人たちの独立をあっ旋し、町内の移住・定住に貢献しています。

北空知管内の花き農家と比べても経営規模が大きく、栽培面積は約330平方㍍。ビニールハウス62棟で主にスターチスの一種、HBSシネンシスを栽培しています。ピンクや黄色の小さな花が多く咲き、花束に欠かせない名脇役として、関東・関西圏の市場に対する需要が高まっています。

2年間という短い研修期間の中で、代表取締役の田村昌之さんは、大規模経営に裏打ちされた栽培技術と安定的な経営方法を研修生に細かく教えています。家族ぐるみで指導に当たるほか、現地講習会への参加を通じて近隣農家と顔合わせをする機会も設けます。ふだんの仕事から離れると、福利厚生の一環で慰安旅行やバーベキューを楽しむなど、研修生とアットホームな関係性を築くことを大切にしています。

見て学ぶ

近隣農家の研修会にも積極的に参加！

家族ぐるみで教える

長男の昌一郎さんも熱心に指導！

まずはやってみる

見よう見まねで実践！

田村農園　代表取締役
田村　昌之さん

60 棟以上のビニールハウスが並ぶ田村農園

一大産地の覚悟と責任

～花きブランドを守る！親子二代で紡いだプライド～

田村農園の研修生の受け入れは、6年前に亡くなった私の父・福治郎が始めました。初期投資がかさむ新規就農のハードルを下げるため、広い田んぼや大きな農機具を必要とする水稲と比べて参入障壁の低い花きの分野に絞り、後継者を育成してきました。

人口減少が進む中、花き農家を減らさず、生産量を確保することは、地域のブランド力を維持し、市場での信頼と有利販売につながります。

担い手の育成事業を始めてから9年後の1998年、一期生の男性が2年間の研修を経て独立。2期生、3期生と続き、関東・関西圏から農業に憧れて町内に移住した研修生が次々に新規就農を果たしました。住み込みできる環境から、私の家族より研修生の方が多い年もあり、にぎやかな光景は懐かしい思い出です。

担い手育成を始めた経緯について、田村昌之さんに聞きました！

北海道指導農業士・北育ち元気村花き生産組合長

移住し、田村農園での研修を終え、花き農家になった皆さん

花き生産連絡協議会の設立を経て、平成10年（1998年）に発足した北育ち元気村花き生産組合の初代組合長は、福治郎さんが務めました。

設立10周年の記念誌インタビューでは「当時、北空知には11のJAがあり、一般的に〝我が村・我が農協〟という雰囲気になりがちなところ、花き生産者においては究極の目的に向かって一心不乱に取り組んでいただいたことが元気村の基礎となっています。花き市場の大型化も組合合併の追い風になりました」と語っています。

北育ち元気村花き生産組合の初代組合長を務めた福治郎さん

設立 10 周年記念誌から抜粋

1 期生の岡村さんは就農 25 年目！

定講さんは、花を「売る」仕事から「育てる」仕事に転身！

合言葉は「北空知の花はひとつ」

北育ち元気村花き生産組合

JAきたそらちとJA北いぶきの両農協（計11支所）で組織する「北育ち元気村花き生産組合」（231戸）は、主力品目のスターチス・シヌアータを始め、シネンシスやダリア、おもちゃカボチャなど、夏秋期産地としての生産量は道内一と言っても過言ではございません。

北空知の花きブランドには根強いファンも多く、道内2、東北1、関東・関西の計15市場と取り引きしており、全国的に無くてはならない産地として位置づけられております。

ただ、主力品目のシヌアータ、シネンシスの2本柱の作付けは年々減少し、各市場からの注文に対して満足のいく供給ができていないのが現状です。水稲面積の拡大や生産者の高齢化が要因とされていますが、それでもこの数年間、高収益作物の花きは安定的な販売価格を保っています。

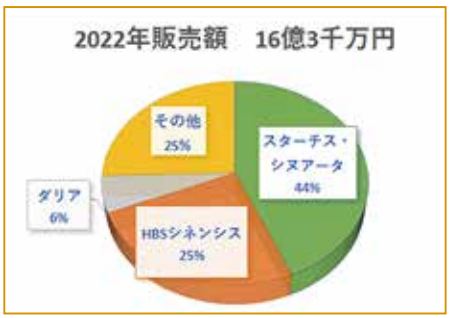
作付け面積の減少は、担い手不足が一つの要因とされており、産地のブランドを守り続ける上で期待の大きな取り組みです。

かつて草花の栽培が多かった妹背牛をはじめ、各地域のまとめ役にご尽力いただいた初代組合長・福治郎さんの代から始まった担い手育成事業。いまは現組合長の昌之さんに継承され、花きに特化した研修を経て就農された方もたくさんいます。

花きの部門でみると、深川市や沼田町などでも担い手の育成に取り組まれています。各自治体によって制度の違いはあるかと思いますが、北空知の関係機関が一体となり、手厚いサポートで新規就農者が1人でも増えることを切に願っております。

北空知広域農業協同組合連合会
花き事業部 販売課
課長 白峰（しらみね） 真樹（まさき）さん

北育ち元気村花き生産組合の令和4年（2022年）の販売額は約16億3千万円で、過去最高額を記録しました。このうち、道内最大級の生産量を誇るスターチス・シヌアータ、HBSシネンシスの2品目で売上全体の約7割を占めています。



組合で生産する花きの種類を細分化すると、全部で75品目を扱っています。例えば、スターチスを購入したお客様が「この時期はこの花もあったよね」という具合に、同じ産地の花を求めるニーズに応えることで仕入れ状況の好循環を生みます。

地域別の売上でみると、組合管内の11地区で妹背牛町が売上高1位の実績を誇り、全体の2割を超えます。各地区とも組合員数や出荷箱数は減少傾向にありますが、販売額が伸びているのは先代が築いた北空知のブランド力といえます。

コロナ禍は仏花として重宝されるシヌアータの需要があり、他産地と比べて販売額の致命的な落ち込みはありませんでした。

また、外出自粛に伴う在宅時間の増加に合わせて、自宅に花が届くサービスのサブスクリプションが関東圏で人気を呼び、売上を後押ししました。

変化に対応する柔軟さ

拓殖大学北海道短期大学
農学ビジネス学科教授　小林（こばやし）　孝夫（たかお）さん

花き専門の道職員だった時代から、田村昌之さんの父・福治郎さんにお世話になりました。

１９９０年代の当時、妹背牛町を含む北空知の花き栽培は、水稲との複合経営が重要視されていましたが、花きの生産は飛躍的には伸びない状況で、道内の大規模産地に遅れを取っていました。

福次郎さんらによる北空知広域連の設立によって、高度平準化が進み、物量による市場での優位性が確立され、全道一の花き産地を形成することに成功しました。

この成功を追随する地域が無かったことからも、それぞれのブランド力を持つ農協をまたぐ広域連携がいかに困難かということが分かります。

北空知の特徴として、古い産地にみられる「こだわり」が少なく、新しい技術の導入や変化する需要に適応できる柔軟さがあります。

水稲や畑作のスマート農業とは対照的に花き生産は依然として手作業に頼る部分が多く、人手不足に歯止めをかける支援が今後も求められるでしょう。

田村農園は、受け入れ体制が整備されていなかった時期から新規参入者を歓迎してきました。農業を担う人材を育てる拓大道短大にとって、住み込みで実習ができる農家は貴重な存在。食事中からも農業経営に対する考え方や姿勢を学ぶことができるからです。

地域とつながる研修体制

空知農業改良普及センター北空知支所
地域第二係長　辻（つじ）　英敏（ひでとし）さん

水稲が主力作物の妹背牛町は、水田の大区画化による農作業の効率化を進めている地域。花きでは、スターチスシヌアータやシネンシス系スターチスの生産量が多く、全道でも指折りの大産地、全国では責任産地となっています。

一方、生産者の高齢化により作付け面積は年々減少。手間のかかる野菜・花きの作付けに対する敬遠意識の高まりから、新規耕作者が少ないのが現状です。

指導農業士で、組合管内でもトップクラスの生産技術を有する田村さんがその経験を後継者に伝えることは、花きの収量・品質の向上に寄与する期待が持たれます。

各地域で就農している新規参入者の定着には、地域とのつながりをしっかりと持つことが重要です。

全ての生産技術を数年間の研修で習得することは難しく、研修中には発生しなかった病害虫の対応など、就農後も経営が安定するまでは、地域農業者からのサポートが必要になります。

そのため、研修中に地域の生産者と親しくなることで有益な情報が得られやすくなり、新規参入者の定着しやすい環境が整います。

閉鎖的と言われることもある農村部ですが、田村さんは、各種の現地講習会に研修生を参加させるなど、地域や関係機関とのつながりを考えた受け入れを行い、広い視点から研修生の新規参入をサポートしてくれていると思います。

冬の訪れを告げる雪虫が飛び交う11月上旬、シーズンを通して初めての花き栽培を経験した2人は、花が切り取られた後の株が残るビニールハウスにいました。早朝から、土で汚れたジャンパーを着て、白い息を吐きながら、花を育てる役目を終えたビニールハウスのシートをはがしていく2人。その表情からは春に見たあどけなさは消え、取材に応じる言葉一つひとつに力がこもっていました。

花き研修の主なサイクル

4～5月	6～8月	9～10月	11月	12～3月
花の定植	一番花の出荷 選花作業のピーク	二番花、三番花の出荷 秋植えの定植	ビニールハウスの片付け	秋植えした花の管理 農業経営に関する勉強

花き栽培の研修は、花の定植作業から始まります。慣らした土に雑草の発生を抑えるシートを敷き、花を支える支柱を立て、穴の開いたマルチに花苗を植えていきます。

定植から90日後に採花時期を迎え、6月からお盆シーズンの8月までが出荷のピーク。ビニールハウスで切り取られた八分咲きのシネンシスが選果場に次々と運び込まれていきます。

選花を担当した戸部さんと町田さんの2人は、花の見栄えが良いものを選んで10本1束に結束し、サイズごとに箱に詰めていきます。

「花は待ってくれない」「せっかく育てた花も、切るのが追いつかないこともある」

多い日で1日に200箱もの花を出荷する慌ただしい状況で、2人は田村さんの経験談に耳を傾けながら、スピードと正確さ、そして体力勝負の仕事を実践的に学んでいきます。

戸部さんは「失敗したら減収になるような大切な仕事も経験させてくれます。経営規模が大きいから、同じ品種の栽培を繰り返し覚えることもできます」と、研修への手ごたえを感じています。

夏の休日には田村さん宅でバーベキューを楽しんだ2人。家族から「スターチスに限っては、1年間の研修で6年分の学びになり、スターチスのプロを目指せるよ」と、激励の言葉を受けました。

町田さんは「体力的に大変な作業もあるけれど、自分たちでやりたいと選んだ職業。田村さんが育てたお花を『この子』と呼ぶように、子育てのように大切に栽培したお花が出来上がった時に、この仕事のやりがいを感じました」と、実感しています。

田村農園での研修は近隣農家への視察・交流も欠かせません。他品種の栽培方法も学んでいる2人は「田村農園で学んだ経験をベースに自分たちの経営に合ったお花の栽培に挑戦することも楽しみです」と、夢が膨らみます。

これからの冬期間は、来春に出荷する花の管理や農業経営の知識を深める時間に充てます。

自分たちの作業風景をスマートフォンで撮影し、動画を見返している2人は「来年がラストシーズン。栽培技術を自分のものにできるように頑張りたいです」と、前を向きます。